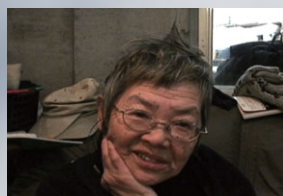


Dé-Sign (脱記号) 21 —記憶のマチエール 2— 映像学科 大津はつね

Dé-Sign 21 —“La Matière de Mémoire #2”— Department of Imaging Art OHTSU Hatsune



平成元年から制作を続けているデ・サインシリーズ (Dé-sign) の21作目。昨年「記憶のマチエール」というタイトルで、戦前から現代まで、生き抜いて来られた方々の「記憶の層」について映像化を試みている。今回は、半世紀以上に渡り、芸術家として人生を歩む女性3人に、封印され続けた戦争体験を語って頂いた。

一人目は、新制作協会創立メンバーで、昭和期に活躍した洋画家・(故) 脇田和氏夫人の脇田八重さんである。脇田八重さんは、現在96歳になられる。画家仲間の5家族で相模湖付近へ疎開していた当時のことを語って頂いた。画家仲間とは、日本の洋画界を代表する猪熊弦一郎、中西利雄、佐藤敬、藤田嗣治であり、彼ら家族との共同疎開の生活や画家たちの様子についての貴重な証言でもある。

二人目は、美術家の園房枝さんである。園さんは、女流画家協会・自由美術協会を経て、78歳の現在でも精力的に活躍している。戦時中は中学生だった事から、「いつだって子供というのは、面白いものに興味を示し、面白がるものだ」と語る。現在、悲惨な戦争体験を語り継ぎたいと言う人もいるが、自分は思い出したくもないし、誰にも語った事がないと言う。ただ「当時、国電のドアが開いたままで運行され、ドアには、丸太がはめられていた」といった強烈なマチエールの記憶が頭に焼き付いているという。また、戦争が続くにつれて、布などのあらゆる物の質感やマチエールが悪いものになってゆき、戦争の前と後では、様々な価値観が断ち切れ自分の中でも分断されてしまったという。

三人目は、日本を代表する舞台美術家の朝倉撰さんである。現在88歳の朝倉さんも「戦争だけは、勘弁して欲しい、思い出すのもいやだ!」との事だった。したがって、現代人について「記憶」という観点から、見解を述べて頂いた。朝倉さんの話には、過去に囚われず仕事を押し進めるのみという強い作家の姿勢が貫かれている。

三人の女性のお話は、その伝えられる内容そのものが、貴重な体験談でもあるのだが、我々にとっては、彼女たちの語り口や音、吐息、リズムそのものがマチエールであり、むしろ意味内容よりも重要視した点である。記憶の底流から発せられる彼女たちの言葉は、現代を生きる我々に勇気を与えてくれる。

スタッフ・キャスト

制作：ビジュアル・ブレインズ (風間 正+大津はつね) Visual Brains (KAZAMA Sei + OTSU Hatsune)

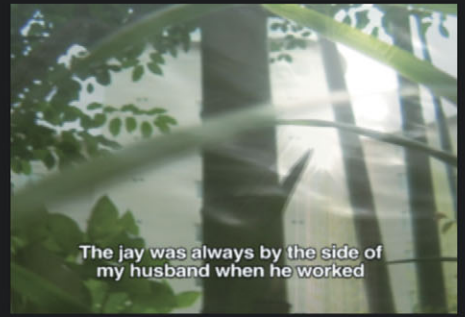
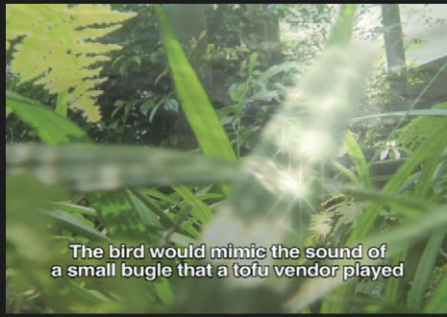
出演：脇田八重 (Wakita Yae)、園 房枝 (Sono Fusae)、朝倉 撰 (Asakura Setu) 歌：風間あまね (Kazama Amane)

音楽：クリストフ・シャルル (CHARLES Christophe) 風間 正 (KAZAMA Sei)

AD：田中綾子 (TANAKA Ayako) 協力：平山 誠 (HIRAYAMA Makoto)

2010/ビデオ/カラー/25分





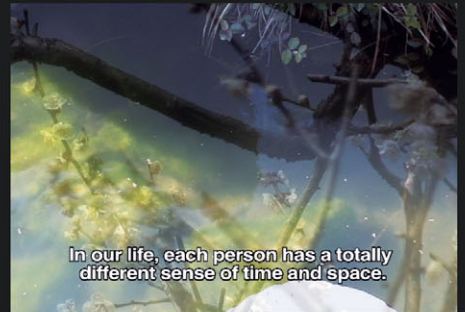
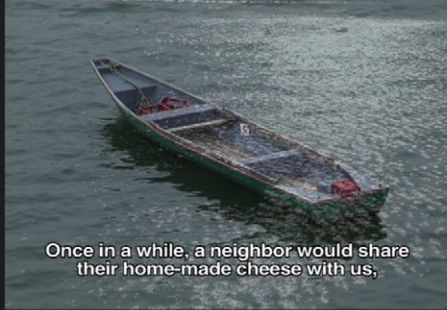
The bird would mimic the sound of a small bugle that a tofu vendor played

The jay was always by the side of my husband when he worked

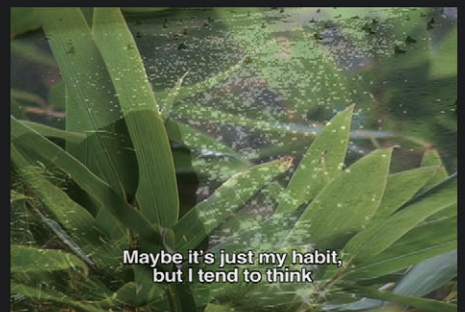


My husband ran off the bridge in a hurry and lay face down,

Once in a while, a neighbor would share their home-made cheese with us,



In our life, each person has a totally different sense of time and space.



and they don't retain the memories.

Maybe it's just my habit, but I tend to think





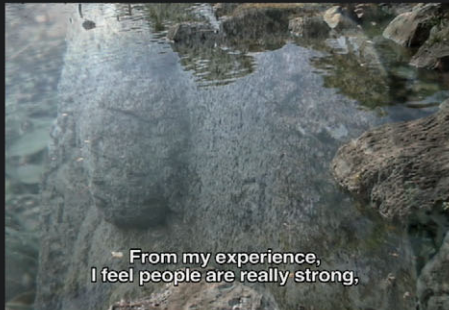
near a mountaintop by the lake.



We were living up high, so we'd see the American planes below us.



I know there are people who want to tell their wartime stories



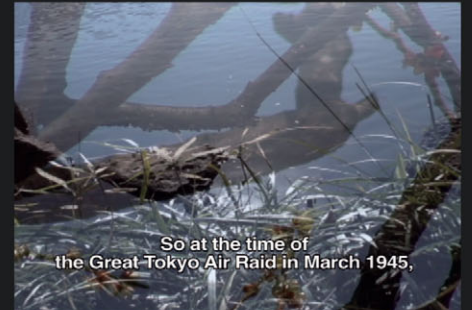
From my experience, I feel people are really strong,



where a lot of people died, I sense something, something very strong.



whether it's a movie, painting or sculpture.



So at the time of the Great Tokyo Air Raid in March 1945,



It's meaningless to just keep worrying, though.



Meaningless, just like counting the number of hairs on a cat.

